

漢籍担当職員講習会（初級）を受講して

原賀，可奈子
九州大学附属図書館収書整理課図書目録係

<https://doi.org/10.15017/7234648>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2023/2024, pp.21-25, 2024-09-18. Kyushu University Library

バージョン：

権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



漢籍担当職員講習会（初級）を受講して

原賀 可奈子[†]

【抄 録】 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター（現：京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター）主催の漢籍担当職員講習会（初級）について紹介する。

【キーワード】 漢籍担当職員講習会、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター、京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター、漢籍目録

A Report on the Elementary Level Practical Workshop for Librarians on Chinese Books

HARAGA Kanako

1. はじめに

2023（令和5）年9月25日～29日の日程で、京都大学人文科学研究所主催漢籍担当職員講習会（初級）を受講した。会場の京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター（現：京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター。以下、「センター」という）は、吉田キャンパス本部構内からは少し離れた場所にあり、北部構内側をさらに銀閣寺方面へと進んだ先、住宅街の奥まったあたりにある。閑静な住宅街に突如として姿を現す洋館にはかなりのインパクトを受けた。10数年前に大学図書館職員短期研修（短期研）で京都大学附属図書館を訪れたことはあったのだが、センターへの訪問は初めてのことであった。

筆者は2023（令和5）年4月1日付で図書目録係に配属された。本学では明版資料のデジタル化に伴い、該当資料の早期の所蔵登録が求められている折であった。勤続15年目で初の目録担当となったのだが、雑誌情報係配属時に、雑誌・図書の目録講習会を受講していたため、一般図書の目録に関しては多少の知識があった。しかし漢籍等稀観書の目録作成に関しては、目録情報の基準やコーディングマニュアル等を見ただけではハードルが高く、まずは専門的な知識を得たいと思い、当講習会の受講を希望した。資料保存の面からの関わりを理由に、過去に西洋社会科学古典資料講習会¹と日本古典籍講習会²を受講したことはあったが、漢籍に関する講習会は初めてであった。



図1 センター外観

[†] はらが かなこ 九州大学附属図書館収書整理課図書目録係
(〒819-0395 福岡市西区元岡744) E-mail: haraga.kanako.374@m.kyushu-u.ac.jp

1 受講報告書「一橋大学社会科学古典資料センター主催講習会を受講して」(前半部分) <https://hdl.handle.net/2324/24955>

2 受講報告書「日本古典籍講習会を受講して」 <https://hdl.handle.net/2324/1812928>

2. 講習会概要

センターでは、「大学図書館・公共図書館・その他の図書館施設等において、漢籍（中国人によって書かれた漢文の書籍）の整理等の業務に従事する図書館職員を対象に、漢籍の取り扱いに関する知識と技術を普及し、学術資料としての漢籍の有効な利用体制の整備に資する」ために漢籍担当職員講習会³を開催している。伝統的な漢籍目録の構造や全国漢籍データベースの詳細に関する講義、漢籍整理法に関する基礎的な講義・実習等を行う初級と、主として漢籍の分類（四部分類）に関する講義、漢籍整理法に関する高度な講義・実習等を行う中級の2種類があり、例年、それぞれ5日間の日程で、10月に初級が、11月に中級が実施されている。

2023（令和5）年度は10月1日付でセンターの組織改編が行われるため、初級は例年よりも早く、9月末に開催された。漢籍目録の実務者を対象としていることもあり、18名の受講者のほとんどが目録業務担当者であった。

3. 講義・実習内容紹介

3.1. 1日目（9月25日）

3.1.1. 漢籍について（永田知之准教授）

漢籍ではないことがはっきりしているものを除外していくことで、少しずつ範囲を狭めながら漢籍の定義に迫ることから講義は始まった。漢籍は、主に中国人によって著された中国で出版された書物、と定義されているが、何をもって「漢籍」と定義するかは図書館によっても異なるという。センターの場合は、中国語のなかでも文言を漢籍としているが、^{ぶんげん}原典が中国語ではなくても中国人によって中国語に翻訳されたものや、ベトナム人や西洋人によって著された漢文も漢籍の範疇に入れるなど、一部例外もあるという。本学の場合は、おおむね辛亥革命以前に中国国内にて刊行された線装本が漢籍、ということになるだろうか。

版木を彫る仕事をしていた人は必ずしも内容を理解していたわけではなく、版木を写す際に、ページ番号を本文に含めて彫ってしまったり、逆に、文字を飛ばしてしまって、特に意味を持たない「而」などの文字を入れることで文字数合わせをして誤魔化すことがあった、というような漢籍に関する様々なエピソードや、四部分類の成り立ちも興味深く、その書物が作られた時代の背景を知ることが大切であることも実感した。

3.1.2. カードの取り方 ― 漢籍整理の実践（楊維公助教）

漢籍目録カード作成実習に向けて、目録カードを作成する際に、何を記したらよいか、どこに注目したらよいか、実例を交えながらの説明があった。書名は必ず巻頭から取ることや、冊数と巻数の違い、撰者の役割の違いなど、ひとつひとつ基本的な事柄を知ることによって、自分にもできるかもしれない、と思わせられる。出版事項については、どのような手法で出版されているか（版木によって印刷された刊本、木活字や金属活字などで印刷された活字印本、西洋の鉛活字を用いて印刷された排印本、付着した油性インクによって印刷される石印本、ガリ版刷りの油印本など）、具体的な見分け方も知ることができた。出版年や出版者の探し方の実例もあり、今後すぐに活かせる知識を得ることができた。

中国では皇帝の諱^{いみな}を使用することは失礼にあたるという考えから、諱と同じ漢字をそのまま使用することを避け、他の文字を当てたり、わざと漢字の画を欠いたりする避諱という慣習があるため、年表記がなくても、避諱によってその書物が記された年代（王朝）を推定することができるということも初めて知ったことだった。日本では逆に、為政者等の名前の文字にあやかっていたことを考えると、文化の違いを感じられる。

3.2. 2日目（9月26日）

3.2.1. 工具書について（高井たかね助教）

参考図書のことを「工具書」と呼ぶことは、恥ずかしながら今回初めて知った。漢籍の目録カードを作成するにあたっては、現物から得られる情報が限られていることも多く、正確な情報を得る

3 <http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/event/courses/>（参照2024-07-24）

ために工具書による裏付けが必要になることも多い。たとえば、姓名ではなく^{あざな}字のみの記載しかない場合や、王朝名の記載がない場合などがこれにあたる。人名検索時に使用するもの、書名から調べる際に使用する目録・解題、鈔刻に関するものなど、具体的な工具書のタイトルと特徴、どのような場合にどの工具書を使えばよいのか、紹介していただいた1点1点について簡単に解説があった。この講義で紹介のあった工具書は会場内の書棚に配架されており、実習の際に実際に利用することができた。すぐに実物を見ることができる環境にあったことも、それぞれを理解するために大きな助けとなった。

3.2.2. 漢籍関連サイトの利用（Wittern, Christian 教授）

主に日本・中国・韓国・台湾・ベトナムの、漢籍に特化した総合目録や漢籍の所蔵の多い特定の機関の所蔵目録、デジタル化された漢籍を見ることができるサイト、目録作成の際に必要な文字や人物や工具書などの情報を調べるためのサイトと、それぞれの特色などを教えていただいた。書誌を作成する際には、他館所蔵資料の書誌を参考にすることもあるので、デジタル化された画像を見ることができると比較がしやすくてとても助かる。資料のデジタル化が進むことによって、図書館員としてもかなりの恩恵を受けていることを実感する。紹介のあったサイトのなかでも、特に国外のサイトは初めて知るものがほとんどだったので、今後、実際に漢籍の目録を作成する際にも役立てていきたい。

3.2.3. 実習を始めるにあたって（永田知之准教授）

先生がおっしゃっていた「泳ぎを知らない人を海の中に放り込む実習」という表現の印象が強すぎて（他の講義の先生方も近いようなことをおっしゃっていた）、目録カード作成実習はスパルタ実習なのだろうか、と戦々恐々としていたのだが、近年は実習に入る前に事前学習のコマを設けてワンクッション置くようになったそうだ。

閲覧の際の注意点を始めとし（ページをめくる際に版心を持たない、など、うっかりやっしまいそうな注意点も事前に知ることができてよかった）、目録カード作成時に必要事項を探し出すことができるように、センター所蔵資料のデジタル画像の実例を交えて解説が行われた。画像があると、より理解が深まるので、そのような意味でもデジタル化が進むことは有益だと感じる。

3.2.4. 漢籍目録カード作成実習

実際にセンター所蔵の漢籍を使わせていただき、目録カード作成を行った。用意されていた漢籍は41点あり、受講生はそれぞれが好きなものを選んで、実物をもとに紙の目録カードへ記入を行う。早く終わった者は、1点目を元の場所へ戻して次の1点を選ぶ。事前に少しずつ必要な知識の講義を受けていたにも関わらず、実際に漢籍の目録を取ろうとすると難しく、質問するにしても何を質問してよいのかすらわからない状態だった。工具書も探してみるが、なかなか必要なものに当たることができなかった。それゆえ、探していた撰者の名前を工具書に発見したときの喜びはひとしおだった。この日の実習時間は1時間で、筆者は1点の目録を作成するのがやっとであった。

3.3. 3日目（9月27日）

3.3.1. 目録検索とデータベース検索（安岡孝一教授）

全国漢籍データベース⁴構築までの流れや、実際のデータベース設計、運用についての話を伺うことができた⁵。本学の漢籍は、遡及入力⁶が追いついておらず、OPACでは未登録の資料もまだまだ多いが、既刊の『九州大学附属図書館漢籍目録』などの冊子目録掲載分については、こちらのデータベースで検索が可能になっている。資料サービス係所属時には、実際にこちらのデータベースを見た利用者から所蔵問い合わせを受けることも度々あり、なんらかの方法で検索できる手段が確保されていることの重要性を感じた。全国漢籍データベースはNACSIS-CATとは別に、どのようにしてすでにある目録カードをもとにして、漢籍に特有なデータを搭載し、検索可能なデータベースを構築するか、という視点から検討が始められている。どのようにして漢籍目録カードの項目を標準化し検索できるようにしたのか、利用する側からは見えない面を知ることができた。

4 全国漢籍データベース <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki?detail>（参照2024-07-24）

5 講義では次の資料をもとに説明があった。こちらの資料はウェブ上でも公開されている（安岡孝一氏「全国漢籍データベースの設計とWWWでの運用」<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~yasuoka/publications/2002-11-19.pdf>（参照2024-07-24））

3.3.2. 漢籍データ入力実習

前日の実習の続きを行った。目録情報をカードに記入しつつ、この日からはテキストエディタ上にも入力を行っていった。午後の4時間を使って、前日の1点に加えて2点のカード作成と、データ入力ができる。この日も時間を要したのは、工具書で撰者の名前や出版社の工房名を確認する作業だ。書物に記載された名前をそのまま撰者名として使用してよいのか、いつの時代の人物なのか等、念のため工具書で確認をしていたのだが、なかなか引き当てることができず、工具書を使用するにも慣れが必要だと感じた。だからこそ、実習ではじっくりと試行錯誤しながら時間を使って調べることができ、とても有意義であった。

3.4. 4日目（9月28日）

3.4.1. 和刻本について（宇佐美文理教授）

和刻本は日本人による日本で出版された漢籍の写しである。漢籍自体をもとに日本で版木を彫って印刷するか、中国から輸入した版木をもとに日本で印刷したものもそれに値する。日本国内で日本人が読むことを念頭に、読み下しのための送り仮名や返り点などを版木に彫って印刷されているものも多い。なんとなく、中学高校の国語の授業に出てきた漢文を思い出した。送り仮名や返り点を、当時の日本人も使っていたのだと思うと親近感が湧く。

中国国内で戦災により原本が失われてしまったために、和刻本や和刻本の版木を逆輸入して中国国内で出版することもあったそうだが、その際は区分としては漢籍になるという。中国で出版されたものは「漢籍」だという初日の講義とも結びつく。同書の漢籍と和刻本の本文比較を交えながらの和刻本の内容や特徴についての説明もわかりやすく興味深かった。和刻本をテーマにした展示会は少ない、という話を聞き、そのような視点から行う展示会も面白そうだと感じた。

3.4.2. 漢籍データ入力実習

前日に引き続き、午後の4時間を使っての実習である。この日は4点の目録カードの作成・入力を行うことができた。少し慣れてきたのか、前日よりスピードが上がった。この日は、とある一行だけ、枠線より一字分頭抜けたところから始まっている文に出くわした。避諱の話は講義で出ていたが、皇帝について記載してある行の文字を枠よりひとつ上から始めるなど、他にも皇帝を敬うための表現があることを知った。先生曰く、よくある表現、ということだったが、わざわざ版木に文字を彫るときも、一行のみ一文字分だけ上から彫られていたのだと思うと興味を惹かれる。現物にたくさん当たることの重要性を実感する。

3.5. 5日目（9月29日）

3.5.1. 朝鮮本について（矢木毅教授）

朝鮮本は漢籍よりも大きく、紙も厚めで、五つ目綴じが多いという特徴がある。漢籍・和刻本の講義でもそうであったが、朝鮮本についても定義の話からスタートした。なにをもって朝鮮本とするか、違いや特徴を踏まえて理解することは重要なことだと感じた。朝鮮本には活字の種類が多いことも興味深いし、日本にきた朝鮮通信使が、朝鮮の国内事情が記された「懲毖録」という機密文書のような書物が日本で流通していることを知り、朝鮮に帰国して報告し、朝鮮国内で問題になり、国外輸出禁止令が出たという小話もあり、ここでも歴史的な事柄とともに学んでいく面白さを感じた。

3.5.2. 実習解説（楊維公助教）

2～4日目の午後に行った漢籍データ入力実習の全点解説が行われ、詳細な解答例と解説を紙媒体でもいただいた。時間の都合で現物を見ることのできなかった資料も多かったが、どこを見るとよいか、デジタル画像入りで解説があったので、実際に資料を見て作成した目録カードの答え合わせになったほか、実習資料全点の概要を確認することができた。とてもわかりやすくてためになった。

3.5.3. 情報交換（安岡孝一教授）

受講者からの質問への回答のほか、参考資料なども教えていただいた。質問は、事前に提出した

アンケート用紙に記入されていたもので、「情報が読み取れないときにどうするか」、「目録カード作成時には、どこまでの情報を書く必要があるのか」、「撰と述の使い分け」、「資料のカビ・劣化対策」、「漢籍データベースについて」、「漢籍の整理のためにはどの程度中国の知識があればよいのか」、「和刻本の目録作成の手引きはあるか」などがあり、他の受講生たちがどのようなことを疑問に感じていたのか、その一端を知ることができた。

筆者は、実習で全国漢籍データベースを使っていた際に、本学所蔵漢籍の所蔵館名が、移転によって消滅した分館名になっているものを見つけたため、このままでよいのか疑問に思い、その旨を質問に挙げていた。所蔵の手掛かりになるのであれば旧所在のままでいいのではないかと、との回答をいただき安心したが、今後冊子体の登録が進むにつれて、所在を現状に合わせる必要も出てくるだろう。データベースの存在も念頭に置いたうえで登録を進めていきたい。

4. 研修を終えて

5日間の研修を受講したことで、早く実際に目録作成に着手してみたいと思えるようになった講習会だった。前述のように筆者は、西洋社会科学古典資料講習会や日本古典籍講習会には資料保存活動に関わっていることを理由に、目録業務担当者ではない時代に受講していたため、その観点からもそれぞれの講習会の違いが気になっていたのだが、西洋社会科学古典資料講習会や日本古典籍講習会が資料保存にも時間を割いており、直接目録業務を担当していなくても講義についていくことができたことに比べると、当講習会は目録実務業務に特化した講習会となっており、実際に漢籍の目録に触れていないと実習でのカードの取り方が難しく、受講の効果が存分に得られにくいのではないかと思われた。筆者に関しては、このタイミングでの受講で本当によかったと思う。なお、資料保存に関する講義は設定されていなかったが、希望者には書庫内の見学案内を行っていただけたため、興味深く見学させていただいた。

研修後、職場へ戻り、さっそく漢籍や和刻本の登録を行った。その際、折丁の隙間から木の葉が出てきた（図2～3）。和漢籍に詳しい職員から、当時は防虫剤として使われていたらしいことを聞いた。実際に現物を見なければわからないことも、当時の文化や風習を知らなければわからないこともたくさんあるのだな、とここでも実感することになった。

ありがたいことに今年度は中級受講の希望が叶った。11月まで日があるため、実地で経験を積み、学習効率を上げるべく備えたい。



図2 挟まれていた葉



図3 図2の葉全景



本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて、本著作のコンテンツ物はクリエイティブ・コモンズ表示－非営利－改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>